書　評

The Life and Times of Cotton Mather. By Kenneth Silverman

(New York: Harper & Row, 1984. 480 pp. $28. 80.)

大　下　尚　一

ここに紹介する Silverman の著書は Cotton Mather の全生涯を扱った学術的伝記としては，今世紀最初のものである。過去半世紀以上もピューリタン研究がアメリカ文化に関する最も実りある研究分野であったにもかかわらず，この代表的ピューリタンについては，なぜ今日まで本格的伝記が書かれなかったのか。本書を手にしたとき，「ついに出たか」という感慨とともに，この問いがまず頭に浮んだ。もっとも Mather の前半生については，David Levin による充実した伝記が1978年に刊行されており，彼の Mather 研究は現在後半生に及んでいると思われるので，Silverman による伝記に Levin の業績を加えて，この問いを問うてもよいであろう。〔*Cotton Mather: The Young Life of the Lord's Remembrancer, 1663-1703.*〕

だがこの問いに答えるのは，さほど困難なことではない。一言でいえば，Cotton Mather という偉大で奇異なる人物を描くのが，多大な労力を要するうえに，極めて困難な仕事なのである。まず Mather は，あまりに膨大な資料を残している。刊行された著作だけで388冊，その他日記，書簡，未刊行原稿，私的メモやノート等，Massachusetts Historical Society に収められたマザー文書だけでも，その量にたじろぐ思いがする。Kenneth Murdock をはじめとする今世紀の初代のピューリタン研究者によって，彼の著作の改訂版が出され，未刊行資料が印刷に付されてきたが，まだ全体を網羅するにはほど遠い。"Biblia Americana" は Silverman の言葉によれば，Mather の代表作 *Magnalia Christi Americana* もそれに並べれば小さく見えるほどの著述であるが，まだ未刊のままである。Mather の書簡も驚異的数量である。Silverman は1971年に約300通を選んで書簡集を刊行しているが，彼によれば Mather が書いた手紙は8千通に及ぶと推定される。〔*Selected Letters of Cotton Mather*〕 Matherが研究者の関心を呼んできたのは，何よりもこの精力的に書かれた著述のゆえであるが，その豊富すぎる資料がかえって伝記の叙述を難しくしてきたといえよう。

次に Mather は，外に現われた行動でも内面の動きでも，起伏に富み，実に複雑な軌跡をとどめている。Nathaniel Hawthorne は，Mather のように「善に満ち，かつ多くの欠陥と弱さを兼ね備えた人物を理解するのは難しい」と述べたが (p. 53)，アメリカ史上で Mather ほど毀誉褒貶に富む人物も少ない。彼の言動を状況の検証を通して把握し，さらにそれを心の内面に立ち入って理解するのでなければ，われわれも同時代人のように，彼の味方か敵かどちらかになってしまう。そのためには，日記と書簡が重要な資料であるが，彼の説教も当時のニューイングランドの状況と Mather の内面とを繋ぐ大切な手立てとなる。それに加えて *Magnalia Christi Americana* や *Bonifacius* 等の多くの著作も，歴史・神学・科学を扱った独立の著述としてでなく，Mather と彼の生きた世界との架橋として文脈を辿る必要がある。Silverman は広範にわたる資料を考証し，洞察に富む

解釈を各所にほどこすことによって，Mather を描きあげた。

Mather にどのようなイメージが持たれようと，彼はまずピューリタンである。ところがピューリタニズムは，研究の専門化がすすむにつれて全体像が見失われる結果を招いた。このことは，Mather を捉える枠組の構成が容易でなくなったことを意味する。ここに，Mather 伝が書かれなかったいまひとつの理由があったのではないか。われわれは，Vernon Parrington の *Main Currents in American Thought* (1927) のように，Mather を短気で干渉好きな，「性的に倒錯した精神病体質」とし，彼の日記を「ひねくれた病的頭脳の産物」ときめつける極端な見方からは，可成自由になった。しかしピューリタン思想への深い理解を示した Perry Miller ですら，Mather の知的達成を高く評価する一方で，彼の人物については Parrington 同様に，異常な性格の持主として捉える傾向にある。Miller の *New England Mind: From Colony to Province* (1953) は，Cotton Mather の知的活動の伝記といえるほど Mather への論及が多いが，この書物から彼の行動や人物を理解するには大きな限界がある。ともあれ Miller がピューリタニズムの本質を知的営為に求めて以来，Mather の思想に焦点をあてた個別研究は，すぐれた成果を生みだしてきた。Richard, Increace, Cotton 三代にわたる Mather 家を思想的展開として描いた，Robert Middlekauff の名著もある。〔*The Mathers: Three Generations of Puritan Intellectuals, 1596–1728* (1970).〕だがそれだけでは，ニューイングランド史に生きた Mather 像を描くことはできない。

歴史家の関心が思想史から社会史へ比重を移すようになって，はや20年近い歳月が経過したが，ピューリタンと彼らが生きた世界を全体として見ようとする志向が，この数年めだつようになった。そこには，研究の方法や対象の多様性にもかかわらず，人びとの生活に即してピューリタニズムを把握しようとする視座が，共通して窺われる。社会史的研究の成果によって，家族，近隣，村落，教会等，さまざまな集団や組織の様態が明らかにされたが，そこで生を営んだ人びとの心性を回復せんとするとき，ピューリタニズムとの関連をどう理解するのか，この課題が現在の研究関心を支えているといえよう。こうして Edmund Morgan が本書を称賛した書評で指摘しているように，ピューリタン研究の焦点は，「神学から体験へ，教義から信心（devotion）へ」と移ってきた。〔*The New York Review of Books*, May 31, 1984〕こう見てくると，Mather 伝が書かれるべき機が熟しつつあったといえるだろう。

Silverman が Mather を理解する態度に，Morgan がいう新しい視点がはっきり認められる。これまで Mather について語られるとき，彼の敬虔な信心を否定する者はほとんどなかった。しかしそれは，彼の野心的な，世俗社会への関心や学問的——神学・歴史・科学に対する——追求の陰に隠されがちであった。あるいは，Richard Mather と John Cotton という創設期の偉大な聖職者を祖父に，Increace Mather という同時代の指導的聖職者を父にもった Cotton Mather であれば，彼の稀なる信心は当然視され，さらには自己中心的誇りの代替物とみなされてきた。しかし Silverman は，彼の信仰体験を辿り，信心のあり様に迫り，それを鍵として Mather 理解を試みたのである。〔現在の研究関心を示すものとして次の2書をあげることができる。Charles E. Hambrick-Stowe, *The Practice of Piety: Puritan Devotional Disciplines in Seventeenth-Century New England* (Chapell Hill, 1982); Patricia Caldwell, *The Puritan Narrative: The Beginnings of American Expression* (Cambridge, 1983)〕

Mather 伝を書く難しさについて最後に言及せねばならないのは，彼が生きた時代がピューリタン=ニューイングランドの変遷期だということである。1684年のマサチューセッツ湾植民地の特許状停止は，Mather 21歳の時である。

以後，彼はSir Edmund Andros 治下のニューイングランド領時代から名誉革命を経て，91年に下付された第二次特許状下のニューイングランドに生き，1728年に大覚醒を見ることなく世を去った。この時期は，対本国関係においても，ピューリタニズムと世俗化の問題においても，社会的発展においても，ニューイングランド史上重要な位置を占めているが，その評価は定かでない。ピューリタンからヤンキーへという構図が一般的にあてはめられる一方，John Murrin のいう「イギリス化（Anglicizing)」の概念もこの時期を捉えるのに示唆的である。〔"Anglicizing and American Colony: The Transformation of Provincial Massachusetts," Ph. D. diss., Yale Univ., 1966.〕宗教的衰退についても，「エレミヤの嘆き」(jeremiad) に示された同時代人による社会的・宗教的堕落への警告は，客観的現実認識というよりは，ピューリタンの心理に根ざした誇張だとする見解も有力である。Silverman は，このいわゆる「衰退神話（myth of decline)」をとる立場には批判的であるが，彼の指摘をまつまでもなく，衰退を計る基準も社会的要因と宗教的要因の区別も明確には設定しえないであろう。(p. 435)

この時代は，ピューリタン植民地建設期と独立革命への道を拓く時代とのはざまにあって，いまだに多くの不確定要素を含み，独自の輪郭は曖昧なまま残されている。かかる時代背景のもとで，Mather を捉えるのは容易でない。Mather像は，巨大な影を無気味に写しだすかと思えば，たちまちそれがいくつにも分れて縮んでいく。概して彼は，頑迷な時代錯誤的三代目として過去に繋ぎとめられるか，啓蒙主義の兆しを宿す人物として，思考の一部だけが切りとられて末来にもち去られる。だがSilvermanは，変遷期に生きた人物として，そのまま Mather を描きだした。本書は標題どおり，Cotton Mather の生涯とその時代を解き明かす。Morgan が前述の書評でいうように，本書は，時代についてとりわけ新しい事実を教えてくれないかもしれない。しかし，われわれは，Mather の生涯を通して，この時代の細部に立ち入るとともに，時代全体の意味を問うことができる。これは，本書の大きな貢献である。

本書において，Mather を中心に多くの小世界が結びつき，ぶつかりあい，重なりあって，より大きな世界が現われてくる。かと思うと，広いピューリタン世界がMather という個人に収斂され，またそれぞれが外に向って広がっていく。この過程で名誉革命に伴う動乱やセイレムの魔女狩が，あるいは教会間の対立や Mather 家のあらわな様相が，舞台の場面を構成する。また Mather の著作が生命を吹き込まれたように，人びとの心性に触れ，さらに海を越えた世界にまで係っていく。こうして Silverman は，Cotton Mather とその時代を再現していく。残された紙面で，その内容を簡単に紹介しよう。

本書は，1663年の誕生から1728年の死に至るMather 65年の生涯を，年を追って14の章にまとめているが，それらは次の5つの時期に大別される。第Ⅰ期（1663—1686）は人間形成期で，11歳でハーヴァード大学に入学，16歳で卒業した後，父の牧するボストンの North Church で牧師になる準備期を過し，85年23歳で按手礼を受ける。聖職につくべく生れついた少年が，学問的にも信仰心においても稀なる天分を示しながら，吃音に悩まされる。この弱点を克服するため父の涙の祈りに支えられ，自らを鍛えていく過程が興味深く語られる。信心の務めを厳しく課し自己を問いつめていく生活は，終生かわらぬ信仰的探求の原型である。第Ⅱ期（1687—1703）は，20歳代半ばから40歳に至る青壮年期で，名誉革命で若い指導者として公的舞台に登場，続いてセイレムの魔女裁判に関与するなど，野心的に活躍しはじめた時代である。*Magnalia Christi Americana* を執筆，ニューイングランドの運命を双肩に荷なう著述家としての使命感にもえる。その一方で宗教的には安定した信仰に満足できず，救済の確かさを求めて "Particular Faiths" を追求，異端の縁にのぞむまで実験的探求をおこなっている。Mather

の生涯では，もっとも関心をそそられる時代である。しかし，この時期すでに，社会的名声とともに私的・公的に多くの反対者をもつようになった。

第Ⅲ期（1703—1713）は，40歳代の充実した活動期を迎えたはずの Mather が，政治的・社会的には総督 Joseph Dudley と対立して疎外され，家庭的には妻 Abigail の死（1702）と Elizabeth との再婚，子供の死（50歳までに15人の子供をもち9人を亡くす）など大きな試練にさらされる。嫉妬心，名誉欲，挫折感にとりつかれ，それにうちかつため「善行の実践」を使命とし，自己のアイデンティティをみいだす。偽名を使って自分を宣伝する手紙を書くなど，人間の醜さをさらけだしながら，ひたむきな信心に没入せんとする姿は，Mather の全人間を理解する鍵のように思われる。*Bonifacius*（善行論）は1710年の刊行で，かたわら "Biblia Americana" のための資料収集とその執筆に精力を傾けている。この努力は，全キリスト教世界への善行の証しであった。

第Ⅳ期（1714—1724）は50歳代で，政治的影響力は回復せず，家庭的にはさらに不幸がつのっていく。妻 Elizabeth を1713年に亡くし，父としての家庭的責任に疲れはてた Mather は，三度目の妻になる Lydia Lee George にめぐりあい，彼女への愛情で活力を新たにする。しかし Lydia との結婚は，苦悩をもたらす結果となる。密月は長く続かず，彼女は精神的に病み夫への不信にとりつかれる。Lydia への愛情ゆえに Mather は彼女の亡夫の遺産管理人をひきうけたが，借金の取りたてや訴訟のくりかえしという，予期しなかった世俗的苦難に身心をすりへらしていく。他方では息子 Increace の不品行により，痛く傷けられる。かかる試練の日々にもかかわらず，Mather の知的関心は昂揚し，自然界への興味へとりつかれる。新しい知的認識と信仰の探求とがひとつになって，*Christian Philosopher* を執筆，21年に同書を刊行している。天然痘の流行にさいして種痘の有効性を説き，息子 Samuel にも種痘を受けさせている。自然界への知的関心と社会的義務感が，彼を種痘の問題に深入りさせたのだが，彼には賛否あい半ばし，浴びせられる社会的非難への対応に苦慮している。この時期の Mather を見ると，衰えを知らぬ探求心と信仰にたつ義務感が，50歳代の人間的完成を妨げているようにさえ思われる。

第Ⅴ期（1724—1728）は，死に至るまでの60歳代の5年間である。ようやく人生の終り近くなるのを感じはじめた Mather は，牧師としての務めに関心を集中させていくが，信徒の信仰生活に関するテーマで著述に励み，1725—27年には37冊のパンフレットを刊行している。Mather は最後まで精力的であったが，個人的には，1723年に最大の庇護者，先達，同労者であった父 Increace を天に送った後は，聖職者の道を選んだ息子 Samuel の働きに慰めを覚える日々であった。死期が迫ると，ニューイングランドの模範として死を迎えることを欲した彼は，最後まで Mather らしい人生を生きたといわねばなるまい。

このような紹介では，本書に見られる精緻な描写も洞察に富む解釈も損われ，Silverman の描く Mather 像はすっかり平板にされてしまったようである。最後に本書の叙述について一二の例をあげ，この欠陥を多少とも補っておきたい。Mather の人気を著しく傷つけてきたものに，魔女裁判における彼の役割があるが，Silverman はまず Mather がいなくても魔女裁判は起こりえたとした上で，この事件に対する彼の関心のあり方と対応の仕方を検討する。Mather はセイレムで魔女が問題になる以前に，精神的発作を起こした少女を自宅にひきとり，牧師として彼女の治癒につとめたが，この経験を通して悪霊の働きをつぶさに観察しようとした。また少女に妖術をほどこしたとして魔女の嫌疑をかけられた女性とも面談し，魔女の確証を詳細に探索している。この結果を，妖術研究や悪魔学を参照してまとめたのが *Memorable Providences*（1689）であるが，Silverman はこの間に見られる Mather の探求が，霊の実

在を確認せんとする努力であり，それによって当時の無神論的・サドカイ主義的（霊の働きを否定する立場）傾向—— Mather は自分自身にもこの志向があると認めた——を克服せんとしたのだという。興味深いのは，セイレムの事件の鎮静化後も彼が悪霊に憑かれたケースに関心を抱き続け，悪霊を排除しうる信心の力を追求していたことで，これが善き天使との出合いに熱中する Mather に連なっていくとする観点は示唆に富んでいる。

Mather の信心における探求は，つねに２つの世界，即ちニューイングランドとヨーロッパとに係りをもつ。前者ではセイレムの魔女裁判が焦点となるが，同時に彼はヨーロッパにおける魔女に関する記録を渉猟し，アメリカの事例について検証した自分の報告が広くヨーロッパで読まれることを念願している。セイレムの魔女裁判に際して Mather は *The Return of Several Ministers* (1692) を著わし，魔女の断罪が確実な証拠に基づかずになされている，と警告した。自由意志による自白を伴わない限り魔女と断定することは危険であり，悪魔は魔女の妖術によらず直接働きかける場合もありうる，と彼は考えていた。「だが然し」と彼は続け，裁判を厳しく遂行すべきことを当局に要請する。この「だが然し」ゆえに，Mather は当時から二心ある人物として非難されてきた。しかし Silverman は，かかる Mather の態度に，マ湾植民地を代表する人物たる裁判官たちへの尊敬の念や，初代国王任命総督 Phips 卿及びその政府を擁護すべきだとする使命感を指摘する。Silverman は，Mather の著作，日記，書簡等を詳細に検討して，この点を明らかにしているが，同時にこの資料が Mather の確信の動揺を示していることにも言及する。日記には修正の跡がめだち，著作や書簡の文章には断定的表現が避けられている。文体に対して払われた細心の注意に，Silverman の研究態度を窺うことができる。

Mather が新特許状に基づく Phips 治下の体制を擁護せんとした背景には，ニューイングランドの歴史が新しい時代を迎えたという認識があった。変遷期に生きる者としての自覚に視点をあてているのが，既に指摘したように本書の特徴の１つである。この点は，*Magnalia Christi Americana* に関する Silverman の叙述によく現われている。ニューイングランド史に貢献した人物の伝記は *Magnalia* を構成する重要な部分であるが，創設期の John Eliot と現在の Sir William Phips との伝記を対比しながら，Silverman は，Mather が創設者の記憶を呼び起こすことによって，現在に生きるニューイングランド人のあるべき姿を劇的に提示しているという。禁欲 (motification) を旨とした Eliot に対して，Phips はメインの辺境に生まれながら立身出世を求め，沈没したスペイン船から引き上げた武器や財宝で財をなした人物である。Mather は Phips の生き方と信仰との両立を描くことによって，荒野に生きた Eliot の信仰が，都会化し，経済的発展を遂げ，イギリス本国との関係が強化した現在に如何なる意味をもつかを追求した。辺境で敬虔だが貧しい父に育てられ，財を得てイギリスよりサーの称号を与えられ，国王に任じられて総督としてボストンに住み，しかも Mather の教会の会員となった Phips は，新しい時代を体現している。

しかし Mather にとって新しい時代は，何よりも教会一致 (ecumenism) 達成の時でなければならなかった。*Magnalia* にはプロテスタント諸派の一致への願望が現われている，と Silverman は指摘する。本書はこのように，*Magnalia* 解釈にユニークな座標を提示している。そして，ニューイングランド設立の原点に立ちつつ教会一致を企図した Mather が，魔女裁判の場合のように矛盾に悩み，非難を浴びながら，牧師の使命に生きる姿を，Silverman は追っていく。

本書は，Mather をわれわれに理解しうる人物として描きあげた。しかしこれを決定版と呼ぶよりは，新しい Mather 研究の扉を開くものと見るのが適切であろう。著者は New York

University の English の教授で，*Colonial American Poetry* (1968); *A Cultural History of the American Revolution* (1976) 等，アメリカ文化史の業績が多い。